

國學院大學學術情報リポジトリ

紹介

青木周平著 『青木周平著作集中巻 『古代の歌と散文の研究』』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 近藤, 信義, Kondou, Nobuyoshi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000238

〔紹介〕

青木周平著

『青木周平著作集 中巻』 『古代の歌と散文の研究』

近藤信義

青木周平氏は、國學院大學教授の現職にあった平成二十年十一月十一日に急逝（56歳）された。氏は生前著書として二冊の研究書、即ち第一著『古事記研究―歌と神話の文学的表現―』（おうふう1994.12）、次著『古代文学の歌と説話』（若草書房2000.10）を出版され、その間その後、さらに多くの古代文学関係の論文を精力的に学会誌等に発表されていた。研究者として将に充実期を迎えつつあっただけに、その急逝が惜しまれてならない。この『青木周平著作集上・中・下』は、青木氏の二著作と学会誌に発表されていた論文等を収集し、その骨格は前

の二著作を活かしつつ、付加できる論文を再編集してまとめ上げた。その編集を担ったのは研究上の後輩であった谷口雅博教授の渾身の努力であり、さらに青木氏の薫陶をうけた若い研究者の労を厭わぬ協力によって完成に漕ぎ着けることができたのだ。その真摯な数々の努力に敬意と謝意を表したい。

☆

『古代の歌と散文の研究』は、以下の目次が示す内容を盛り込んでいる。（章末に付した「に留意されたい。」）

第I編 古事記における神話・説話と歌

第一章 記紀における歌謡と説話 第二章〈国見〉と〈国生み〉 第三章 淡島と淤能碁呂島 第四章 巨木伝承の展開と定着 第五章 雄略記・三重姦物語の形成」

第六章 記紀の主題と歌—シビ(志叱・鮪)歌群を中心に 第七章 記紀歌謡の歌掛け 第八章 歌謡資料としての琴歌譜

第Ⅱ編 古事記の〈日の御子〉像と歌

第一章 八千矛神 第二章 倭建命 第三章 仁徳天皇 第四章 雄略天皇」

第Ⅲ編 日本書紀の歌と説話

第一章 神代紀一書と歌 第二章 三輪神宴歌謡からみた大物主神伝承像の形成 第三章 弘計・億計二王—出典と歌(1)— 第四章 日類子と大葉子—出典と歌(2)—

第Ⅳ編 万葉集の歌①—季節歌の始発と展開—

第一章 舒明天皇国見歌 第二章 人麻呂吉野讃歌—国見歌の継承— 第三章 人麻呂吉野讃歌—季節歌の始原— 第四章 季節歌の展開 第五章 人麻呂歌集季節歌」
第六章 明日香皇女挽歌と季節表現 第七章 讃歌と季節表現 第八章 万葉集の季節

第Ⅴ編 万葉集の歌②—初期万葉の表現—

第一章 相聞の系譜—恋歌の流れ(1) 第二章 天智天皇と鏡王女の歌—恋歌の流れ(2)— 第三章 持統天皇の天武天皇挽歌 第四章 人麻呂歌集の旋頭歌

第Ⅵ編 文字・散文表現と万葉歌

第一章 万葉集の〈訓読〉 第二章 万葉集の表現「きく・きこゆ」 第三章 神功皇后伝承と筑紫文化圏
初出一覧(及び) 解説(倉住薫)

以上

先に氏の二著作の「骨格を活かしつつ」と述べたが、当著作集の目次構成上に若干の説明を加えると、第Ⅰ編の第一章「五章の」までは、初著書『古事記研究』の第二〈歌謡と説話〉から同順序での掲載で、したがって第六・七・八の各章が新規に配置された論文となる。第Ⅱ編の第一〜四章の「」までは次著『古代文学の歌と説話』の〈Ⅱ 古事記の歌と説話〉のラインアップをそのままに配した。第Ⅲ編は次著の〈Ⅲ 日本書紀の歌と説話〉から第一、三、四章を、第二章は初著第二〈歌謡と説話〉の第六章から移した。第Ⅳ編は次著の〈Ⅳ 万葉集の歌〉の第一〜第五章のラインアップを同順序で掲載し」まで、以降第六・七・八章は新規の論文。第Ⅴ編は次著の〈Ⅳ 万葉

集の歌)の第二章の二篇をそのまま配し、第三・四章は新規の「論文。第VI編の第一・二・三章は新規の論文。(なお、各論文の掲載誌は著作集末の初出一覧を参考にされたい。)

右のように、当著作の構成は前二著の意図を汲み上げつつ、青木氏の研究動向とその継続・将来性を見据え、いわば未来志向的編集となつている。その青木氏の文学研究の意図、あるいは方向付けは、氏自身のことばで次のように語られている。

文学研究とは、作品の特質に視点を定めつつ、それを他の作品との関連において相対化させる行為だとつくづくと思ふ。——中略——(日本神話)は記紀・風土記それぞれに即した文脈の中で個別化しておさえ直され、(歌謡)が記紀の登場人物の歌として作者論的に意味づけられていく。私の前著『古事記研究—歌と神話の文学表現』はその方向を徹底させる形で古事記の特質をおさえることに意を注いだ。……(『古代文学の歌と説話』)

この引用は次著の「あとがき」にあるもので、貴重な所信表明である。この路線は氏自身の矜持でもあり、一貫して貫かれていた文学研究の態度であった。振り返ってみると、初著の『古事記研究』が42歳での刊行。次著の『古代文学の歌と説話』が48歳での刊行であり、当著作集に新規に配された論考は、その

後を継いでいずれも50歳前後に作成された諸論文であるが、谷口氏の手によって整理を見た配置は、その所信を受け継いで未来志向的に配されている。つまりここから出発できるのである。誰が、何を引き継いで行くのかのメッセージが籠められている。

改めて当著作集の目次を見直してみると、全くの新規の三論文がVIに位置付けられているところを注目してみる必要がある。つまり、ここに氏が拓こうとしている新しい領域が顔を出しているということになるのだが、この期間は氏にとって学務上もつとも激務の中にあつた。平成13年4月から学部長、加えて同15年4月から副学長を兼務し、当時病床にあつた阿部美哉学長を支えて、同16年3月まで学長代行の立場にあつた。こうした中であつての執筆である。一章の「万葉集の(訓読)」は記紀・風土記中にみえる和語(ここではノム)がどのような漢文字を選び取ったか、翻せば漢語に付された古訓の解明というまさに文字文化の問題であり、古語に携わる者が注意すべき問題の種子がある。第二章の「万葉集の表現「きく・きこゆ」」は、先行した『古代語を読む』(桜楓社「1988」)が呼びかけた「古代のことばを古代の文脈の中で読んでみよう。」のメッセージが、まさに氏の研究所信とも呼応する問題意識と言え、あらた

な氏の指導領域が現れているように思われる。三章の「神功皇后伝承と筑紫文化圏」は講演記録という。伝承というモチーフで「神功皇后」を追いつけてゆくと古事記・万葉集的なものと日本書紀的なものとの、それぞれの輪郭を見せてきれいに整理されてくる。資料をゆつくりと読み解きながらの講演は古代文学の魅力を語る語り手として、氏への期待が拓かれてゆく一面を見る思いがする。

また、これらの全論文の解説を担当された倉住薫氏の、丁寧なダイジェストが参考になり、有り難い。

☆

最後に私情を交えて恐縮だが、青木周平氏の名を知ったのは、「記紀にみえる巨木伝承―その展開と定着」(上代文学41号1978)著作品集(第四章)の論文だった。氏の大学院(博)時代26歳の折りの投稿論文で、この時、俊英の出現を感じたのだ。この論旨明快な論に接してエールのハガキを送ったことが、以降三十年に渉って厚誼を結ぶきっかけとなった。その間、氏はまさに古事記研究の第一線の研究者として着々と歩み続けられた。賢弟愚兄のことは通り、彼の前ではわが身を恥じ入る思いに駆られながら、教育と研究に邁進する姿を頼もしく見続けてきたものだった。今、著作集の紹介の筆を執らねば

ならなくなったことの口惜しさが改めて襲ってくるが、せめてもの一文を捧げて、ご冥福を祈りたい。

合掌

(A5判、五八四頁、おうふう、二〇一五年十一月発行、定価
一、二〇〇〇円+税)